

子どもがつくる子どものまち「ミニはままつ」実践報告 —地域のNPO法人と大学生との連携による子どもの遊びのまち創造プロジェクト—

Practice Report on the Town of "Mini Hamamatsu" : A Collaborative Project between a Local NPO and University Students to Create a Play-Town for Children, by Children

名倉一美*

I. はじめに

本報告は、平成26年11月末に「浜名湖ガーデンパーク体験学習館」で行われた、子どもがつくる子どものまち「ミニはままつ」プロジェクトの概要についてまとめたものである。この活動は、ドイツのミュンヘン市で継続的に取り組まれている「ミニ・ミュンヘン」をモデルにしたものであり、浜松地域の子どもたち（主に小学生）が主役となってまちを運営した。それを支えたのは、浜松市の子育て支援NPO法人「ころころねっと浜松」のスタッフと、浜松学院大学の学生スタッフである。本報告では、「ミニはままつ」実現に至るまでの具体的な取り組みの経緯と、実践の成果や課題点を整理し、今後の参考資料となる記録を残すことを目的とする。

II. 子どものまち「ミニはままつ」の背景

ミニはままつモデルである「ミニ・ミュンヘン」とは、ドイツのミュンヘン市にて1979年から開催されている、7歳から15歳の子どもたちが運営する遊びの都市のことであり、現在日本でも多くの文献等でその活動が紹介されているⁱⁱ。ミニ・ミュンヘンのねらいは、子どもたちが遊びながらまちの運営を体験することを通して、社会の仕組みを学ぶことであり、まちの中には、市長、銀行、ハローワーク、学校、コック、運転手、大工など大人の社会と同様のさまざまな職業が設けられている。子どもたちはまちの中で働いて「ミニミュ」ⁱⁱⁱというお金を稼ぎ、稼いだお金の一部は税金として徴収され、残ったお金で食べたり遊んだりまちの中で使ったり、貯金をしたりすることもできる。近年は2年に一度、夏休みの3週間にわたって開催されており、ミュンヘンオリンピックスタジアムにて延べ3万6000人（2004年）が参加する大規模なイベントとなっている。卯月ⁱⁱⁱ（2010）はこのミニ・ミュンヘンについて、“子どもが自治と民主主義を学ぶ実践的な場”であり、“子どもであっても自分が一人の人間としてその存在を認められ、生きていく自信を持ち、「自立心」と責任感が育まれる。自分と友人との関係を通じて、個人と社会との関係を学び、コミュニティの存在をも学ぶ最良の機会となっている”と述べている。このミニ・ミュンヘンをモデルとした取り組みは、日本各地にも広がりを見せている^{iv}。

*浜松学院大学（保育学、保育者養成）

静岡県内でも、平成25年に静岡市が常設型の「子どもクリエイティブタウンま・あ・る」を設置した。今回「ミニはままつ」を開催するにあたっては、さいたま市の「ミニさいたま」や横浜市の「ミニヨコハマシティ」の実践報告を参考にしたり、大学生は実際に静岡市の「ま・あ・る」を見学したりして、企画立案のヒントを得た。

Ⅲ. 「ミニはままつ」開催に至るまでの経緯

ミニはままつ開催のきっかけは、平成24年に筆者が参加した地域活性化の会議にて「ミニ・ミュンヘン」を紹介したところ、同会議に出席していたNPO法人「ころころねっと浜松」の代表者である池谷氏に関心を持ち、筆者の所属する大学の学生との共同開催の呼びかけがあったことから始まる。保育者養成校に勤務している筆者は、以前からミニ・ミュンヘンと「保育」との共通点^{iv}に注目しており、指導ゼミ学生に同活動を紹介したところ、ゼミ生からこの実践を要望する声があった。そこで、もしも浜松で開催ができたならば、参加する子どもの健全育成だけでなく、その運営を学生が担うことで保育者に必要な実践力を身に着ける機会にもなると考えていた。よって今回の池谷氏からの共同開催の呼びかけは、筆者にとっても学生にとっても大変ありがたいものであり、この活動を、ゼミ活動^{vii}の中心に位置付けて取り組むこととした。「ミニはままつ」と名付けられたこのプロジェクトは、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の事業としても認められ（申請者：NPO法人ころころねっと浜松）、本格的に動き始めることとなった。

Ⅳ. 第1回「ミニはままつ」の概要

1. 「ミニはままつ」の目的

ミニはままつは、次の4点を目的として開催された。

- ①子どもたちが、活動を通して、自分たちの暮らす町のしくみや、生活を支えている様々な職業について知ること。
- ②子どもたちが、仲間と協力したり、問題について調整するといった体験を通じ、コミュニケーション能力を高めること。
- ③子どもたちが、自分たちの力で活動を成し遂げることで、充実感を味わい、自信をつけることができること。
- ④上記の3つのことを経験した子どもたちが、自分たちのふるさと浜松に愛着を持ち、成長していくこと。

2. 日時及び場所

日時：平成26年11月30日（日） 10：00～15：00

場所：静岡県浜松市西区「浜名湖ガーデンパーク 体験学習館」

3. 参加者

- ・当日参加人数：年長児～小学 6 年生 計 242 名

対象は、活動の規模を考慮して上限を小学生までとした。(ただし中学生以上は、大人ボランティアスタッフとして誰でも参加可能である。) また、子どものまちであるミニはままつ内には保護者が入れないことから、保護者の同伴がなくても遊ぶことができる年齢として年長児以上を対象とした。(ただし年中児以下の子どもは、ミニはままつ入口の「幼稚園」や「研究室」にて保護者同伴で遊ぶことができる。保護者は「大人ツアー」にてミニはままつの中を見学することができる。なお、この「幼稚園」「研究室」と「大人ツアー(旅行社)」も、ミニはままつで子どもが働くことのできる職業の一つである。)

参加定員数は、会場の広さから想定して 250 名とし、10 月に近隣の小学校や幼稚園・保育所、子どもが集まりやすい公共施設にチラシを配布して募集を行った。また、大学生が地元のラジオ局に出演して宣伝もした。参加を希望する子どもの保護者は電話やメールにて NPO 法人に事前申し込みをすることとした^{viii}。

当初は参加者が集まるか不安であったが、実際にはチラシ配布後 2 週間あまりで定員に達し、多くの参加希望をお断わりする事態となった。このことから、いかに「ミニはままつ」の内容が子どもにとって魅力的であるかが明らかとなり、実際に参加した子どもの保護者からも、“事前にチラシをみてどの店で働きたいか何日も前から考え楽しみにしていた”といった声が聞かれた。

4. 運営スタッフ

(1) 子どもスタッフ

- ①子どもスタッフ(小学 4 年～6 年) 20 名

「子どもスタッフ」とは、まちづくりの中心を担う子どもたち(子ども店長)である。事前に「まちづくり会議」にて話し合いを行うため、募集対象を小学 4 年生～6 年生に限定した。7 月に近隣の小学校及び子どもが集まる公共施設にチラシを配布して募集を行った。子どもスタッフになりたい子どもの保護者が NPO 法人に直接電話にて申し込んだ。

- ②ミニ子どもスタッフ(年長～小学 3 年) 12 名

「ミニ子どもスタッフ」とは、まちづくり会議に出席した大人スタッフの子どもや子どもスタッフの弟妹で、小学 3 年生以下～年長児のことである。

(2) 大人スタッフ

- ①NPO 法人「ころころねっと浜松」関係者スタッフ 20 名

代表者の池谷氏をはじめ、副代表の宮本氏、ママさんスタッフの他に、ひまわり 2525 プロジェクトスタッフ(音響担当)も参加した。

- ②学生スタッフ(大学生) 26 名

- ・浜松学院大学現代コミュニケーション学部子どもコミュニケーション学科の名倉ゼミ 3

年生9名と4年生11名である。特に中心となったのは、まちの要となる市役所(3年生)、ハローワーク(3年生)、銀行(4年生)、学校(4年生)を担当する4名であった。

- ・名倉ゼミ以外の浜松学院大学生2名が、当日ボランティアとして参加した。
- ・浜松医科大学の学生が、病院ブース担当として当日4名参加した。

③高校生ボランティア 5名

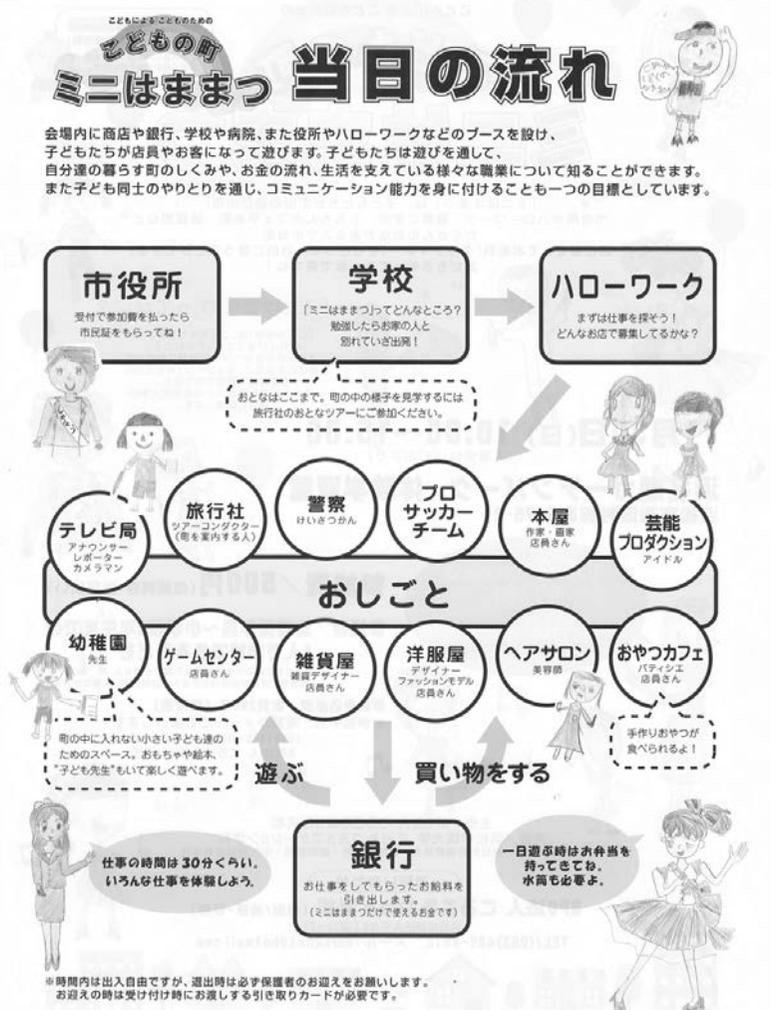
事前に大人スタッフとつながりのある高校等にボランティア募集のチラシを配布したところ、申し込みのあった生徒である。

5. 「ミニはままつ」の実践内容

(1) 当日の流れ

ミニはままつ当日の流れは、チラシ裏面に掲載されていた図-1のとおりである。

<図-1: ミニはままつ活動の流れ(ころころねっと浜松スタッフ作成)>



(2) 職種及び担当スタッフ

具体的な職種・お店の内容やスタッフの人数等については、表-1に示す。

<表-1：職種と仕事内容>

職種・店	スタッフ (大学生・・・学院大生)	子どもの仕事内容 (市役所のみ大人の仕事内容)	必要なもの
市役所	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生1名 ・NPO法人2名 <p>*受付を行うため大人のみで対応とし、当日の子ども店員募集は行わなかった</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の受付を担当（市民証の発行、保護者に緊急連絡先の記載を依頼）・迷子や呼び出しの対応（保護者対応） ・花いっぱいプロジェクト（仕事が足りない時にお花紙で花を作ってまちを飾る活動）運営 	<ul style="list-style-type: none"> ・住民票・市民証・ひも ・記入用筆記用具・市長のタスキ・お花紙、ゴム、両面テープ等
学校	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ1名 ・大学生2名(学校と研究所で連携) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミニはままつの仕組み、ルールについて教える 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明用の紙芝居等
研究所	<ul style="list-style-type: none"> ・当日の大学生ボランティア1名 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験(吸水性ポリマーの芳香剤作り)について教える 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験用器具(ビーカー、スポイトなど)・材料(吸水性ポリマー、アロマオイル、カップなど)・説明ボード等
ハローワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ1名 ・大学生1名 ・高校生1名 	<ul style="list-style-type: none"> ・求職者に求人票を渡す ・仕事の紹介、アナウンス 	<ul style="list-style-type: none"> ・求人票・ハンコ等
銀行	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ2名 ・大学生2名 ・高校生1名 	<ul style="list-style-type: none"> ・給料の支払い ・お金を作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・お金・金庫・窓口等
旅行社	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生1名 ・NPO法人1名 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者にまちの説明をしながら、案内する 	<ul style="list-style-type: none"> ・旗・メガホン・パンフレット(地図)・説明の紙等
警察	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ6名 ・大学生1名 	<ul style="list-style-type: none"> ・パトロール(落し物、迷子、人探し) 	<ul style="list-style-type: none"> ・警官の制服・帽子・パトロール表等
TV局	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ2名 	<ul style="list-style-type: none"> ・取材に出かける 	<ul style="list-style-type: none"> ・メイキングDVD・パソコン

	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO 法人 2 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・レポートする・撮影する ・記事を読む・番組をつくる 	<ul style="list-style-type: none"> コン・DVD プレーヤー・ テレビ・マイク・原稿・ ビデオカメラ・腕章等
幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生 2 名 ・NPO 法人 1 名 ・当日の大学生ボランティア 1 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園にきた子どもたちと遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃ、パズル、エプロン等
病院	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO 法人 1 名 ・浜松医大生 4 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・病気の人の診察をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・診察台・問診票・白衣・ 注射器・聴診器・薬等
美容室	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ 3 名 ・大学生 3 名 (3 店舗協力して) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヘアアレンジ・ネイルをする ・ヘアアレンジグッズを作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・リボン・ヘアピン・ゴム・くし・カラーシール・ 姿見等
洋服屋(ファッションショー)	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO 法人 3 名 (製作担当 1 名 + 音響担当 2 名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・服や財布を売る ・服や財布を作る ・ファッションショーに出る 	<ul style="list-style-type: none"> ・洋服材料 (カラーポリ袋、テープ、色紙、リボンなど) ・袋等
芸能プロ (アイドル)		<ul style="list-style-type: none"> ・ダンスレッスンをする ・衣装を身に付けて、ステージの上で歌う、踊る 	<ul style="list-style-type: none"> ・衣装・マイク・音響・ ステージ等
雑貨屋	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ 4 名 (雑貨屋 3 + パン屋 1) ・ 大学生 2 名 (各店舗 1 名ずつ担当) 	<ul style="list-style-type: none"> ・雑貨 (アクセサリ・剣・プラ板) を作る ・雑貨を売る 	<ul style="list-style-type: none"> ・雑貨の材料 (ビーズ、 段ボールなど) ・はさみ、 オーブン等
パン屋	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO 法人 1 名 ・高校生 1 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・パンを作る ・パンを売る 	<ul style="list-style-type: none"> ・パンの材料 (小麦粉粘土) ・皿、絵の具、 オーブン等
本屋	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ 3 名 ・大学生 2 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・本 (なぞなぞ、ぬり絵など) を作る ・本を売る 	<ul style="list-style-type: none"> ・本の材料 (紙など) 、道具 (色鉛筆など) ・本作りの見本 (図鑑など) 等
カフェ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ 2 名 ・大学生 1 名 ・NPO 法人 2 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・調理する (パンケーキのトッピング、白玉団子作りなど) ・接客する (注文を取り料理を運ぶ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・材料 (パンケーキ・生クリーム・白玉粉など) ・ 皿・フォーク・台拭き・ エプロン・メニュー・注文票等
ゲーセン	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもスタッフ 3 名 ・大学生 1 名 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームの受付と説明・ゲームの運営・景品を渡す 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム (もぐらたたき、釣りぼり) ・景品・割引

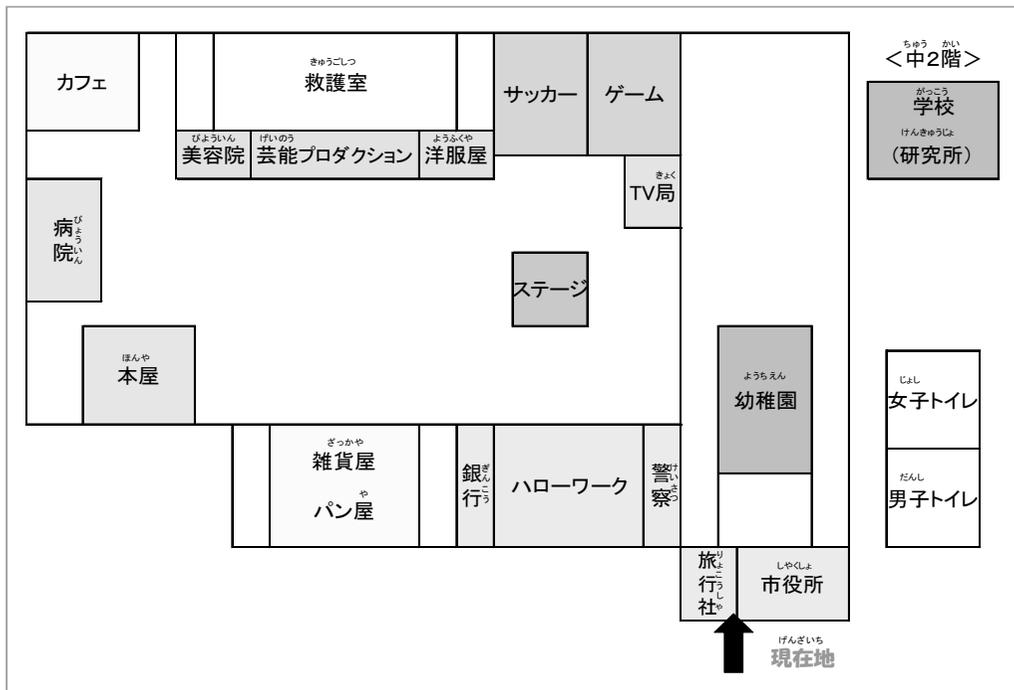
	・NPO法人1名		券等
プロサッカークーチー ム	・大学生1名 ・高校生1名 ・子どもスタッフ2名	・ゲームの受付と説明・得点計算・景品を渡す	・サッカーボール・ゴール ・得点板・得点表・割引券・ビブス等

各ブースを担当した浜松学院大学のゼミ学生は、保育者養成の学びも兼ねているため、各自「指導案」を作成し、活動のねらいを明確にして具体的な計画をたてた。

(3) 会場図

ミニはままつの会場図は、図-2のとおりである。会場下見を2回行い、空間サイズを測ってから、最終的な店の配置を決定した。

<図-2 ミニはままつの地図(旅行社担当学生が作成。市民証に記載)>



V. ミニままつ開催に至るまでの流れ

(1) まちづくり会議+準備会

子どもが主体となってまちをつくるのが「ミニはままつ」の目的であることから、まちの運営を担う子どもスタッフとの「まちづくり会議」が、本活動の重要な基礎作りの場となった。会議では、事前に池谷氏が作成した「スタッフ手帳」が、子どもスタッフ（ミニこどもスタッフ）と大人スタッフに配布された。この手帳には、まちづくり会議の内容

と当日までの流れが記載されており、これを見れば先の見通しが持てるようになっていた。まちづくり会議の進行は、池谷氏と、学生スタッフの代表者4名が担当した。この代表者は、まちの要となる「市役所」「ハローワーク」「銀行」「学校」を担当する4名である。会議全体の進行は池谷氏が担当し、代表学生が各自の担当する内容について、交替で説明や進行を行った。場所は全て浜松学院大学で行った。受付にて、初対面でもお互いの名前がわかるように、白ガムテープで即席の名札を作って貼るといった配慮がなされた。

また「ミニはままつ」の実現に向けて、約半年間にわたる継続的な準備が行われた。まちづくり会議の当日や、本番一週間前の週末及び前日は「準備会」と位置づけ、子どもスタッフ大人スタッフが集まり集中して準備を行った。この準備会以外にも、各お店のスタッフ間で必要な仕事を割り振り、持ち帰って準備をしたり、適宜集まって準備を行ったりした。実際に行われた「まちづくり会議」と「準備会」の具体的な内容については、表-2に整理して記述する。

<表-2：まちづくり会議と準備会の概要>

	日時・場所	会議・準備の内容 (担当大人スタッフ)	会議・準備の様子
第1回まちづくり会議	10月5日(日) 9時半～12時 浜松学院大学	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションゲーム(学校担当の学生) ＊自己紹介ビンゴゲーム ＊集団ゲーム「マッシュマロix」 ・子ども店長決定(店を決める)(池谷氏) ・市のマークの募集(ハローワーク担当の学生) 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初に池谷氏から「ミニはままつ」について説明が行われた。 ・コミュニケーションワークでは、子どもも大人も楽しんで参加する姿がみられた。初めての顔合わせでも緊張感がほぐれ、自然に交流することができた。 ・今回は初開催のため、事前に大人スタッフが店の候補を決め、子どもスタッフがやりたい店を選ぶ方法を取った。(ただし店の内容は子どもスタッフと相談して決めた。)子どもスタッフは、まずは店の紹介内容を聞いてから、自分のやりたい店を選び決定した。その際、希望する店の人数バランスに偏りが生じたため調整が必要であった。
第2回	10月19日(日) 9時半～12時 浜松学院大学	<ul style="list-style-type: none"> ・お金の単位決定(銀行担当の学生) ・次回の市長選挙の 	<ul style="list-style-type: none"> ・「スタッフ手帳」にはお金の単位のアイデアを記入する欄が設けてあり、1回目の会議でアイデアを記入してくるよう呼びかけられていた。そ

まちづくり会議		<p>連絡（市役所担当学生）</p> <ul style="list-style-type: none"> * 立候補の方法と、演説の原稿作成について伝達 ・各店舗にわかれて準備 	<p>のため、2 回目会議の受付で子どもスタッフが考えてきた通貨単位のアイデアを確認し、すべての案をホワイトボードに貼り出して、スタッフ全員で投票を行って決定した。その結果、ミニはままつの通貨単位は「はま」（図—3）に決定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の会議で子どもスタッフの担当する店が決まったので、この会議から店ごとにわかれて準備が進められた。
第 3 回まちづくり会議	<p>11 月 2 日（日） 9 時半～12 時 浜松学院大学</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・市長選挙（市役所担当の学生） * 立候補者（4 名）の演説 * 別室による投票→開票 ・市のマークの決定（ハローワーク担当の学生） * 市長選挙と同時に投票 ・招待状作り（銀行担当の学生） * 子どもスタッフが自分の友だちにわたす招待状を作成 ・各店舗にわかれて準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・立候補者は、担当学生が用意した穴埋め式の演説シートにあらかじめ自分の考えを記入しており、演説時にそれを読み上げた。どの立候補者もスタッフ全員の前で堂々と自分の主張を述べており、大変すばらしい演説となった。今回の選挙では、担当学生が本格的な雰囲気作りを目指し、選挙ポスターを張ったり投票場所を別室に作ったり、学生スタッフがスーツを着るなどして工夫を凝らした。その結果、厳かな雰囲気の中で子どもスタッフが期待を持って投票をする様子がみられ、楽しみながら自治の仕組みを理解することに繋がっていた。投票により市長は 5 年生の女兒に決定した。市長は当日開会宣言をし、次点の副市長（4 年生男児）は、閉会宣言をすることとなった。 ・市のマークの応募は 17 案あり、子どもスタッフが積極的にアイデアをねった様子がうかがえた。投票により決定したマークは、市民証（図—4）の表紙とお金に記載された。
準備会	<p>11 月 23 日（日） 終日 浜松学院大学 11 月 24 日（月祝） 終日 浜松学院大学</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各店舗で準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・本番に向けて各店舗で準備を行った。来場した子ども達がわくわくするような夢のまちを作り上げるためには、単に必要な遊具や用具があるだけではなく、質の高い環境作り（装飾や看板の工夫、遊具用具の強度や安全性への配慮、空間の配置や活動の動線への配慮など）の徹底が

			求められた。また、あくまで大人ではなく子どもが主役であるため、準備段階でも子どもの手で作り上げることが重要であった。この点を意識しながら、試行錯誤を繰り返し、スタッフ一同が協力し合って準備が行われた。
前日準備会	11月29日(土) 終日 ガーデンパーク	<ul style="list-style-type: none"> 大学から材料・遊具等を運搬(ワゴン車2台+軽トラック1台) 本番に向けた準備 	<ul style="list-style-type: none"> 本番を明日に控え、実際の流れを確認しながら準備を行った。会場が徐々に作り上げられるにつれ、楽しい雰囲気が醸し出され、スタッフ一同の気持ちも高ぶり、明日への期待を持ちながら準備をする様子がみられた。

<図-3 通貨：銀行担当学生が作成> *□は銀行印を押す場所



*実際は青色の紙に印刷



*橙色の紙に印刷

通貨単位の「はま」は、まちづくり会議にて投票で決定し、デザインは銀行担当の大学生が作成した。年長児や低学年の子どもも参加しているため、計算が複雑とならないよう、50はまと100はまの2種類のみを用意することとなった。

(2) 大人スタッフ会議（ミニはま実行委員会）

「ミニはままつ」開催に向けて、大人のスタッフ会議（ミニはま実行委員会）が繰り返し開かれた。初開催のため、すべてを一から作り上げる必要があること、また異なる立場の複数の人間が連携して取り組む活動であることから、会議を通して共通理解を図ることが重要であった。表-3には、「ミニはままつ」に向けて実際に行った会議とその概要について記述する。

<表-3：大人スタッフ会議の概要>

日時	場所	参加者	内容
6月10日（火） 14：40～15：40	浜松学院大学	池谷氏、ゼミ3年生、筆者	・池谷氏との初顔合わせ ・全体の流れと今後の予定について
7月8日（火） 14：40～15：40	浜松学院大学	池谷氏、ゼミ3年生、筆者	・子どもスタッフの募集について ・まちの内容について（店の候補など）
8月5日（火） 13：00～14：00	浜松学院大学	池谷氏、ゼミ3年+4年2名、筆者	・担当する店の担当と具体的な内容について
8月5日（火） 14：30～15：30	大学近隣のカフェ	池谷氏、ゼミ3年4年の代表4名、筆者	・まちづくりの要となる市役所、学校、ハローワーク、銀行の役割について ・まちづくり会議の内容について
9月12日（金） 12：00～13：00	ころころねつと浜松	池谷氏、ママさんスタッフ5名、筆者	・まちの店の概要と担当について ・第1回まちづくり会議について
10月1日（水） 10：40～12：10	浜松学院大学	池谷氏、ゼミ3、4年生、筆者	・4年生顔合わせ ・第1回まちづくり会議の説明、コミュニケーションワークの試行
10月5日（日） 12：15～13：00 まちづくり会議後	浜松学院大学	池谷氏、宮本氏、池谷氏の夫、ゼミ3、4年生、筆者	・第1回まちづくり会議の振り返り ・今後の予定について
10月7日（火） 10：40～12：10	浜松学院大学	池谷氏、代表学生4名、筆者	・第2回まちづくり会議の内容と担当について（通貨、市のマーク）
10月13日（月） 13：00～14：00	ガーデンパーク	代表学生4名、筆者	・ガーデンパーク体験学習館の視察 ・店の配置考案
10月15日（水） 10：40～12：10	浜松学院大学	池谷氏、ゼミ3、4年生、筆者	・第2回まちづくり会議の説明 ・店の配置相談
10月19日（日） 12：15～13：00	浜松学院大学	池谷氏、池谷氏の夫、ゼミ3、4年生、	・第2回まちづくり会議の振り返り ・各店舗の準備の進捗状況報告

まちづくり会議後		筆者	・チラシ配布について
10月27日(月) 13:00~14:00	浜松学院大学	池谷氏、代表学生4名、筆者	・第3回まちづくり会議の内容と担当について(マーク決定、市長選挙)
10月29日(水) 10:40~12:10	浜松学院大学	池谷氏、ゼミ3,4年生、筆者	・第3回まちづくり会議の説明 ・各店舗の準備の進捗状況報告
11月2日(日) 12:10~13:00 まちづくり会議後	浜松学院大学	池谷氏、池谷氏の夫、宮本氏、ゼミ3,4年生、筆者	・第3回まちづくり会議の振り返り ・各店舗の準備の進捗状況報告 ・ラジオ出演者決定
11月2日(日) 14:00~随時解散	ガーデンパーク	池谷氏、池谷氏の夫、ゼミ3,4年生、筆者	・会場視察、備品の確認 ・各店舗の広さ確認 ・各店の配置最終決定
11月12日(水) 10:40~12:10	浜松学院大学	池谷氏、ゼミ3,4年生、筆者	・各店舗の準備の進捗状況報告 ・当日の流れの確認
11月20日(木) 12:00~14:00	ころころねつと浜松	池谷氏、筆者	・各店舗の大人スタッフ配置の調整 ・準備会の打合せ
11月23・24日(日・月祝)準備の合間	浜松学院大学	全員	・準備をしながら随時細かい所を相談
11月26日(水) 10:40~12:10	浜松学院大学	宮本氏、ゼミ3,4年生、筆者	・各店舗の最終準備状況の報告 ・前日準備と当日の最終確認
11月29日(土) 準備の合間	ガーデンパーク	全員	・準備をしながら随時細かい所を相談

ここに記述した以外にも、各担当者同士で随時、積極的に話し合いが行われた。ゼミ生はこの時間以外に、毎週のゼミの授業時間内でも話し合いや伝達を行った。

(3) 資金と材料について

本事業は、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成を受けて行われた。各店舗の実情に合わせて予算が支給され、その予算内で準備を行った。また本活動は、浜松学院大学の実践力向上プログラムの一環であることから、準備はゼミ活動のために用意されている大学の教材室(DiCoRes推進室)の遊具や用具、材料を活用した。ただしこの教材室は大学全体での共同場所である点や、学生は保育者の教材作りの工夫を学ぶという点から、できるだけ手作りで必要以上にお金をかけず、けれども子どもたちがわくわくするような遊び空間となるよう、手作りで質の高い環境を構成することが条件であった。また、大人が全て作り上げるのではなく子どもが準備を行うことが重要であり、それに適した環境を考えることが課題であった。企画を担当した大人スタッフは、適宜子

どもたちと相談し、スタッフ同士でアドバイスし合い、与えられた予算内で創意工夫をこらしながら、積極的に廃品を活用するなどして準備に取り組んだ。

VI. 「ミニはままつ」の成果と課題

1. 「ミニはままつ」の当日の様子

筆者は当日、ビデオカメラで撮影を行いながら会場全体の様子を観察し、必要に応じて各場所の援助に入った。ここではその映像や参加者の発言及び記録を参考にし、筆者の視点からみた当日の実際の様子について、時系列に沿いながら記述をする。

(1) 開会宣言

ミニはままつの開場直前にスタッフが集まり、ミニはままつ市長による開会宣言が行われた。市長となった児童はタスキ（大学生が作成）をかけて堂々と宣言を行っており、自分が市長であることに誇りを持っている様子がうかがえた。当日は“大人社会”の新聞社の記者から取材を受けたが、その際も堂々と回答する様子がみられた。

(2) 市役所（受付）

当日は、会場前に長い列ができ、早くから開場を待つ親子の様子がみられた。市長の開会宣言後、10時にミニはままつがスタートすると、多くの子どもと保護者が次々に市役所にて受付を行った。保護者は保険料を含む参加費500円を支払い、それと引き換えに市民証（図一4）とミニはままつの通貨「100はま」（図一3）を受け取る。保護者は受け取った市民証等に緊急連絡先、お迎え時間等を記入するといった流れであった。

開場時は受付の混雑が予想されたため、参加する子どもの保護者に対し、事前（申し込み時）にできるだけ時間をずらして参加するよう呼びかけていた。また当日は、急遽戸外に机を運び、保護者が記入する場所を広く確保した。その結果、多少の混雑はあったが大きな混乱が起きることはなく順調に受付が行われた。なおこの際の誘導には、子ども警察が担当するといった工夫もなされた。

(3) 学校

市役所で市民証を受け取った参加者は、学校に行きミニはままつの流れを学ぶ授業を受けた。この授業は、子どもたちにわかりやすいように紙芝居で行われ、担当学生が事前に紙芝居の作成をした。開場直後は混雑が予想されたため、担当学生同士が連携して誘導や調整を行った。

(4) ミニはままつの中へ

学校で授業を受け終わった子どもから、ミニはままつの門をくぐって中に入った。ここ

から先は保護者や年中児以下の子どものみは入場できない。ただし幼稚園や、学校に隣接された研究室は、保護者と年中児以下の子どものみ遊ぶことができるため、多くの子どもや保護者が楽しむ姿がみられた。なお、会場となった体験学習館は、階段を上ると2階から館内を見渡すことができるため、保護者は子どもの様子を上部から見るのが可能であった。

開場当初は、門の付近に多くの保護者が集まり、中に入った子どもに対して指示を出したり見守ったりしていた。子どもたちも保護者を気にしている様子であった。しかし、まちの中で働いたり買い物をしたりしているうちに、次第に子ども達は保護者のことを忘れ、夢中になって遊ぶようになっていく様子が見られた。「子どものまち」の魅力について、池谷氏と宮本氏は「保護者が中に入れないという点が大きい」と述べている。子どもが保護者から離れることで、本来子どもがもつ自立心が芽生え、自分のやりたいことを自分で考え判断し行動する。保護者もそうした子どもの姿を見ることで安心し、子どもから離れることができるのである。今回、大人スタッフとしてかかわったある保護者からも、自分の子どもが別の店の子どもスタッフとして堂々と働く姿を見て成長を感じたとの感想があった。卯月（2010）は子どものまちを“自治と自由の場”と述べている。ミニはままつが「子ども」のまちであることの意味は、こうした点にあるといえるだろう。

（5）ハローワーク

ミニはままつ内に入った子ども達は、市役所（受付）で受け取った通貨「100はま」をつかって店で買い物等をすることもできるが、ハローワークに行き仕事を探し働くこともできる。このハローワークでは、現在求人募集が出ている職業が紹介され、店ごとに必要な人数分の求人票が発行される。子どもたちは自分の働きたい店の求人票を受け取り、それを持ってお店に行き働くという仕組みとなっていた。

ミニはままつ運営で最も複雑だったのは、このハローワークでの求人票の発行手順であった。店ごとに勤務時間も必要人数も異なるため、計画的に求人票を発行する細かい事前調整が必要であった。ハローワーク担当の学生スタッフは、各店の担当スタッフと何度も打ち合わせをし、時間調整や人数調整を行った。

当日は、働きたい仕事の求人が終了してしまい希望の仕事につけない子どもや、求人が出ていても希望者があられない店が出て、その都度、担当スタッフが臨機応変に声をかけたり誘ったりする必要があった。なかなかやりたい仕事につけず、ハローワークの前で長時間待つ子どもの姿もみられた。こうした子どもの様子について池谷氏は、“やりたい仕事の求人がなくても次のチャンスまで待っていたり、別の仕事を選んだり、子どもは自分で判断して行動し、けんかやトラブルはなかった。また、遅れて参加した子どもに対しては、自然に求人を譲る様子も見られ、その姿がとても素晴らしかった。”と述べていた。子どものまちは自治のまちであり、「大人が子どものためにやってあげる」といった場所ではない。実社会においても、全てが自分の要求通りに進むわけではなく、子どもたちはミ

ニはままつの中でそうした状況を体験し、コミュニティに所属する一員として自分なりに受け止め対応していたと考えられる。このような葛藤経験も、ミニはままつで得られた貴重な経験であったといえるだろう。なおこうした事態については、あらかじめ大人スタッフ間で予測して共通理解を図っており、もしも子ども店員が求人通りにこななくても臨機応変に対応することとなっていた。こうした各店舗スタッフの柔軟な対応も、大きな混乱が起きなかった要因の一つであったといえるだろう。

(6) 各店で働く

求人票をもらった子どもは各店に行き、担当の大人スタッフや子どもスタッフから仕事内容を教わり働く。終了時間がきたら、各店の大人スタッフから市民証に勤務時間の記入と証明印（ハローワーク担当学生製作の各店舗の特徴を表した消しゴムハンコ）を押してもらい、それを銀行で見せることで、働いた分の給料を受け取ることができる。

ミニはままつを運営するにあたっては、各店の大人スタッフが、働きに来た子どもに対してどのような仕事を任せるのか、また、店を一緒に作ってきた子どもスタッフとの役割分担はどうするのか、事前に話し合い予想をして決めておくことが重要であった。当日は、各店舗それぞれの特徴に合わせて、工夫しながら子ども店員の対応がなされていた。その結果、店によって苦労はありつつも、子どもの様子に合わせた適切な配慮がなされており、多くの子どもたちにとって、店で働くことが楽しく充実した時間を過ごすことにつながっていた。なお、こうした各店舗での具体的な活動場面については、本報告書では省略するが、あらためて別の機会に整理及び分析を行う予定である。

(7) 銀行

働き終わった子どもは銀行に行き、市民証に記載されている勤務証明（各店の大人スタッフが記入した時間と印）を見せる。銀行スタッフはその記録から、勤務時間10分につき「100はま」の計算で給料を渡した。

当日の銀行運営は、大きな混乱が生じることはなく適切に給料の支払いができていた。「100はま」と「50はま」の2種類といったわかりやすい単価としたことも混乱を避けることができた要因であった。また事前にお金を大量に作成しておいたため、不足することもなかった。なお、銀行はハローワークと隣接していたため、ハローワークの混雑時にはスタッフが連携をしながら助け合って運営をする姿がみられた。

(8) 再び働いたり買い物をしたり遊んだり…

働き終わって給料を受け取った子どもは、再びハローワークにて仕事を探してもよし、受け取った給料で買い物をしたり遊んだりしてもよし、自分の好きなようにまちの中で過ごすことができる。参加した子どもたちは、ミニはままつの一連の流れをすぐに理解し、

繰り返し自分の好きな場所を選んで働いたり買い物をしたりと、まちでの活動を十分に楽しんでいる様子が見られた。途中で帰りたいといった子どもはおらず、保護者が迎えにくるまで一人ひとりが思う存分楽しんでた。宮本氏はその充実した様子について、「驚いたのは、とにかくけんかや泣いている子どもが一人もいなかったこと。夢中で遊んでいるから、トラブルが起こるような場面が生まれなかった。」と述べている。子どもは、自分のやりたいことを自分で選び自分で考え行動している時には、一人ひとりが充実した時間を夢中で過ごしているため、他者との不必要なトラブルを起こす事態そのものが生じない。今回の実践では、こうした子どもの姿を自然に生み出す遊び環境を創造することができたといえるだろう。このことが「ミニはままつ」の成功の証であったと考える。

(9) 閉会宣言及び片付け

15時にミニはままつは名残惜しまれながら閉会となった。副市長が会場中心のステージにて閉会宣言を行った。ミニはままつの閉会にふさわしい気持ちのこもった閉会宣言であった。閉会時は時間いっぱいまで遊んでいる子どもが多かったため、保護者が迎えに来てもなかなかミニはままつから出てこず、スタッフが呼び出しと引き渡しに追われる場面があった。最後まで子どもたちが楽しんだ証ともいえるだろう。

ミニはままつ終了直後、会場を17時までには明け渡すため、大人スタッフ全員で早急に片づけが行われた。片付け終了後にスタッフ全員で記念撮影を行い、その場で解散となった。(その後、学生スタッフ8名は大学に行き、備品やゴミの運搬など最終片づけを行った。)

2. 「ミニはままつ」の成果—振り返りを通して—

(1). 子どもスタッフとその保護者の振り返りから

ころころねっと浜松では、ミニはままつの取り組みを「思い出BOOK」として一冊の冊子にまとめた。そこには、ミニはままつの活動全体の流れ、子どもスタッフによるミニはままつでの思い出を絵日記風に記録したもの、子どもスタッフとその保護者のアンケート結果、大人スタッフのコメントなどが掲載されており、後日、参加したスタッフ全員に配布された。表-4は、「思い出BOOK」に掲載された、子どもスタッフ及び大人スタッフ対象のアンケートの結果内容を抜粋したものである。

<表-4 思い出BOOKに掲載されたアンケート結果より抜粋>

子どもスタッフアンケートより (28人回答)	
「ミニはままつ」はどうか	とても楽しかった 25 楽しかった 3 ふつう 0
	あまり楽しくなかった 0 ぜんぜん楽しくなかった 0
自分が担当したお店に	・たくさんの人が来てくれたのでうれしかったです。

<p>ついて よかったと思うこと</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな人としゃべれた。 ・働いてくれる人が多かったこと。 ・ほかの人に説明したり教えたりするのが好きだからよかった。 ・みんな優しく、声をかけてくれた。 ・お姉さんたちと協力出来たこと・大学生とみんなで仲良くお店を開けてよかった ・みんなと協力できたこと ・全部売れてよかった。・いっぱい売れた・売り上げが高かった ・スムーズに作業を進められた。 ・大きなトラブルもなく、しっかり撮影できた ・企画した番組を楽しんでもらったり、他のお店のいいところを撮って、TVで流したり、実際のTV局と同じような事ができてよかったです。 ・もぐらを出すところがよかった。 ・警察の帽子、ピストル、衣装がカッコよかった。 ・はんこを押してお金を渡すこと。 ・楽しくできたこと。
<p>自分が担当したお店について 大変だった、困ったと思ったことは？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お客さんが一度に来た時、大変だった。・予想以上に人が来て、人手がちょっと足りなかった。・たくさん警官になりたい人がいて、準備をしてあげるのが大変だった。 ・初めの方は、お客さんがぜんぜん来なかった。・ゲームコーナーで、お店に来てもらうために、人を集めるのが大変だった。 ・求人の人がくるのがあいまいで、撮影中などに来たりして、仕事中途半端になりかけたことが困った。 ・ハローワークで求人票をもらう時、自分の働きたいお店で働けなかった（人気の店の求人票がすぐなくなる）・他の店でも働きたかった。 ・たくさん売り物をつくらなければいけなかったこと。・白玉の粉をねることが大変だった。・本屋で本を作ること。・景品がなくなったこと。 ・ピコピコハンマーがこわれた時。 ・ラッピングの見た目が× ・言葉を読めなかった（年長） ・いろんなお店の場所がわからなかった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・売上げがとても少なかったこと。 ・宣伝を流しっぱなしだった。 ・お金を数えるのが大変だった。 												
子どもスタッフの保護者アンケートより（抜粋）（29 人回答）													
お子さんを「ミニはままつ」に参加させてみてどうでしたか？	<table border="0"> <tr> <td>とてもよかった</td> <td>27</td> <td>よかった</td> <td>2</td> <td>ふつう</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>あまりよくなかった</td> <td>0</td> <td>ぜんぜんよくなかった</td> <td>0</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	とてもよかった	27	よかった	2	ふつう	0	あまりよくなかった	0	ぜんぜんよくなかった	0		
とてもよかった	27	よかった	2	ふつう	0								
あまりよくなかった	0	ぜんぜんよくなかった	0										
感想（good）	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが楽しく過ごせた、たくさん友達が出来たとよろこんでいました。 ・準備から参加し、自分で考え、伝える、形にする、互いに助け合う・・・と大人の前では見せない、生き生きした姿を見れた。 ・本人が自分の意見を持ち、発表することができた。大人に指示され従うのみではなく、自分で働くことを学べたと思う。 ・自分の思いを1から形にしていく、というのが貴重な体験でした。親目線でいくと、あれこれ口出ししたくなってしまうが、大学生の方が温かく聞き入れてくださり、本当に子どもたちが作りたい町が出来上がったと思います。 ・本番はとてもスムーズに子どもたちが動いていて、仕事をしたりしてとても楽しんでた。キッズニアと同じことが、みんなの力でできていることに感動しました。 ・チームに分かれて、準備から本番まで動いたので、責任感も出て、終わった時も達成感もあったと思います。 ・世の中がどのように回っているか触れることが出来たと思います。 												
感想（bad）	<ul style="list-style-type: none"> ・準備期間が短くて大変でした。夏休み等、長期休みを挟んでくれるとよいかと思いました。 ・最後、お給料があまって使い道がなかったようなので商品を事前に仕込んでいくなどした方がよかったのでは。 ・まちづくり会議をもっとやった方がいいと思った。 ・男の子が参加できるような店がもう少しあったらよかったと思います。 ・招待状を送った友達が、申し込みをしたけれど定員になってしまい来られなかったのが残念。 												

子どもスタッフの 28 人中 25 人が「とてもたのしかった」と回答しており、残り 3 人も「たのしかった」とのことで、参加した子どもスタッフはミニ浜松の活動を十分に楽しん

でいたことがわかる。また子どもスタッフの感想からは、さまざまな人とのコミュニケーションがとれたことや、各店ででの仕事にやりがいがあったことも明らかとなった。一方で、困ったことや大変だったことについては、各お店での具体的な作業のことが述べられていた。先にも述べたが、ハローワークでの求人の問題も挙げられていた。こうした点は次の実践に生かすようにしたい。

子どもスタッフの保護者アンケートでは、29人中27人が「参加させてとてもよかった」、残り2人も「参加させてよかった」と回答しており、保護者からも、「ミニはままつ」を肯定的に受け止められていたことが明らかとなった。また感想からは、「ミニはままつ」の目的である“子どもたちが社会のしくみをしること”や、“仲間と協力してコミュニケーション能力を高めること”、“自分たちの力で成し遂げることで、充実感を味わい自信をつけること”が達成できたことがわかる。このことから、ミニはままつがミニ・ミュンヘンと同様の“子どもが自治と民主主義を学ぶ実践的な場”となっていたといえるだろう。一方、保護者の指摘から、準備期間や招待状の問題、商品の数や活動内容の検討など、いくつかの課題点も浮かび上がった。

(2) 大人スタッフの振り返り

「思い出BOOK」の中には、ミニはままつの運営に携わった大人スタッフの感想も記述されている。そのいくつかを、以下に抜粋して紹介する。

- ・子どもたちが真剣に考えて本を作る姿はとても素敵でした。私には思いつかないような辞典やクイズを書いていて驚きましたし、読んで楽しい本がたくさんできたと思います。当日、子ども店長が呼び込みをしたり、工房の子どもたちの本を作る手伝いをしている姿は、本当に頼もしいなと思いました。
- ・ある女の子がお仕事を終えた後に、キラキラとした表情で言ってくれた「わたし、今日でアイドルになるって決めた！」という言葉がずっと心に残っています。ミニはままつは、子どもたちに夢や希望を与える素敵なイベントになりました。
- ・子どもたちが持つ率先して活動を行う力にとっても感動しました。ミニはままつ本番前は、私一人でまわせるかと心配していましたが、いざ蓋を開けてみたら、私は後ろから眺めるだけで、子どもたちは予想以上の仕事をしてくれていました。ミニはままつに参加する事で見えた「成長している姿」が一番印象的です。

これらの感想からも、ミニはままつでは子どもが自主性を発揮して、率先して行動をしていたことがわかる。こうした子ども自身の“自立と自治”の姿を大人スタッフが丁寧に支えることで、子どもが主役の子どものまちを創り上げることができたといえるだろう。

大人スタッフは、この「思い出BOOK」への投稿の他にも、実践の翌週に反省会を開き、労をねぎらうとともに雑談を交えながら活動の振り返りを行った。またゼミ3年生は、全員が各自の実践をレポートにまとめて具体的に振り返り、1月末のゼミナール中間発表会

にて成果発表をした。ゼミ4年生のうち8名は、各自の卒業論文にて今回の実践記録をデータとしてまとめて分析し振り返りを行った^{*}。1月には池谷氏と宮本氏と筆者にて反省会を開き、来年度の相談も含めながら最終総括を行った。

今回のミニはままつの実践は、保育者養成課程の学生の指導の場とも位置づけていた。この報告書では詳しくは触れないが、その成果については、学生の記録をもとにあらためて整理・分析を行うこととする。

3. 今後の課題

第1回ミニはままつは、全体的には大きなトラブルもなく、子どもにとっても大人にとっても充実した活動となり、成功したといえるだろう。しかし、いくつかの課題点も浮かび上がった。ここではその課題点について、あらためて記述する。

① 参加者の募集と定員について

今回の定員は250名であったが、スタッフの想像以上に希望の申し込みがあり、NPO法人スタッフが電話対応で多数のお断りをしなければならない事態となった。今後、継続して実践を行う場合には、定員数とその募集方法について改めて検討を行う必要がある。

② 活動の主導性について—スタッフの立ち位置の問題—

ミニはままつは子どもが主役のまちであったが、今回は初めての開催であったため、事前に大人が準備をする部分も多く、一つひとつの活動において、どこまで子どもに任せるかといった判断が重要であった。保護者の感想や当日の様子から、子どもの自主性を育てるためには、いかに大人が必要以上に手や口を出さないかが重要となる。しかし、全てを子どもに任せてしまうと、夢のまちの実現に至らない危険性もある。特に今回のミニはままつの実践では、子どもスタッフとそれを支える学生スタッフ、さらにそれを支えるNPO法人スタッフといった複数の立場があり、互いにとってよりよい関わり方とは何かを考えながら行動することが求められた。今後も、子どものまちを子どもたちが主体となって作り上げるための援助について、それぞれの立場から検討することが重要である。

③ 活動内容の充実について

保護者の感想の中に、今回は男の子向けの活動が少なかったのではといった意見があった。店の内容については、今回の反省を踏まえて、子どもたちの意見を取り入れながら、よりよいものとなるよう検討していく必要がある。

④ 継続の可能性について

ミニはままつ当日、参加した子どもたちから「来年もやってね」との声が多数きかれた。また、子どもスタッフや保護者、大人スタッフからも、来年度の開催を熱望する声が上がっている。今回のミニはままつの実践では、ミニ・ミュンヘンと同様の“子どもが自治と民主主義を学ぶ実践的な場”を作り上げることができ、子どもにとっても大人にとっても充実した時間を過ごすことができた。こうした活動は一度きりで終わりにするのではなく、

地域の子どもたちのために地域に根付いた活動となることが重要であるだろう。そのためには改善を重ね、地域と大学との連携を強化し、継続が可能となるような組織体制作りを行う必要がある。いつかミニ・ミュンヘンのように、ミニはままつを経験した子どもたちが大人になり、今度は大人スタッフとしてミニはままつを支えるようになる、そんな循環が生まれることを期待したい。

-
- i 同法人 HP の定款によると、「この法人は、浜松市及びその周辺に在住する子どもとその保護者に対し、育児に必要な有益な情報を提供すると共に、親子遊び・子育て勉強会・親子コンサートの開催及び育児サポーターの育成等を通じ、地域の子育て支援活動に寄与することを目的」とする団体であり、すでに長期間にわたって地域に根差す子育て支援に取り組んできた実績がある。また、こどものまちと共通点のある「かえっこパズル」といったイベントも開催しており、経験豊富な法人である。
 - ii 代表的なものとして、ミニ・ミュンヘン研究会（代表 卯月盛夫）製作（2005）ドキュメンタリーDVD「ミニ・ミュンヘン—もうひとつの都市—」（2010年に“2”発行）、木下、卯月、みえ（編著）（2010）「こどもがまちをつくる『遊びの都市—ミニ・ミュンヘン』からのひろがり」がある。
 - iii ミニ・ミュンヘン研究会代表者
 - iv 佐倉市の「子どもがつくるまち・ミニさくら」や、市川市「子どもがつくるまち・ミニいちかわ」などがある。詳しくは、木下、卯月、みえ（編著）（2010）「こどもがまちをつくる『遊びの都市—ミニ・ミュンヘン』からのひろがり」に記載されている。
 - v 静岡市が整備し、指定管理者として株式会社丹甫社が運営している。HP (<http://maaru-ct.jp/>) によると、“こどもクリエイティブタウンま・あ・るは、清水駅前の複合ビル「えじりあ」の3・4階にある、こどもたちを対象に仕事体験やものづくり体験を通じて、自主性や創造性を育み、未来の地域産業を担う人材を育てる施設です。ま・あ・るで育った子どもたちが将来的に静岡のまちの活力を支えることをめざして、子どもたちや地域と「ともに創り、育み、育つ」運営を行っています。”と紹介されている。
 - vi 具体的には、ミニ・ミュンヘンが“遊び”の中で話し合い協力し合って、子ども達が主体的にまちをつくる体験型自治学習の場であるのに対し、保育も“遊び”（体験）を通して総合的に発達を促す場であること、環境を通して子どもの自発的な関わりを重視すること、集団遊びを通して他者との協同性を育むことなどが共通点であると捉えている。ミニ・ミュンヘンは幼児期の集団でのごっこ遊びの拡大版ともいえるだろう。「プロジェクト保育」と呼ばれる保育方法とも共通点が多い。この、“保育とミニ・ミュンヘンの共通点”については、改めて別の機会に分析を試みたい。
 - vii 筆者の所属する浜松学院大学では、実践力育成カリキュラム「DiCoRes プログラム」の中で、ゼミ指導は、実践的な活動を通して行うことが位置付けられている。
 - viii 事前申し込みとした理由は、今回が初開催であることから、実際にどの程度の参加希望者がいるのか予想が難しく、事前に参加人数を把握することで事故や混乱を防止するためである。飲食できるカフェも設置するため事前に食物アレルギーの把握も行った。
 - ix ウィリアム・J／クレイドラー、リサ・ファーロン著、プロジェクトアドベンチャージャパン訳（2001）「プロジェクトアドベンチャーの実践 対立がちからに グループづくりに生かせる体験学習のすすめ」で紹介されているコミュニケーションゲームである。
 - x 他3名の学生が卒業論文に記載しなかったのは、卒業論文を別のテーマで記述していたからであり、実践の振り返りは各自行っている。

<参考/引用文献・資料>

- ・木下勇・卯月盛夫・みえけんぞう編著（2010）、こどもがまちをつくる「遊びの都市—ミニ・ミュンヘン」からのひろがり、萌文社
- ・ミニ・ミュンヘン研究会（代表 卯月盛夫）製作（2010）ドキュメンタリーDVD、ミニ・ミュンヘン—もうひとつの都市—vol.2
- ・大西宏治（2010）、子どもたちの創るまち：ミニ・ミュンヘン、地域生活学研究（1）、p97-108
- ・酒井一郎（2005）、ホリスティック感性教育によるコミュニティビジネス実践—“ミニたまゆり”子どものまち」プロジェクト事例研究—、人間福祉研究（8）、p69-91